一心太助の天秤棒

～前の籠には責任を、後の籠には信頼を肩に担で売り歩く～

越谷市会議員　白川　ひでつぐ

シリーズ/NO　１７３号

Web サイト　Youtube　Twitter　Spotify

駅頭は小さなドラマの連続だ！

初当選以来６期２４年目。毎日毎朝続ける東武鉄道の市内６駅での朝の駅立ちは、通算４６００日を超えました。私の日々のツィッターのつぶやきから、転載したものを含め、駅前の様々な市民との出会いや何気ない駅前の風景、市民の日常を通した暮らしへの息遣いをエピソード集としてシリーズでお届けしています。

YouTube の白川ひでつぐ公式チャンネルの登録者は２９３名を超えました。引き続き配信を継続していますので、これまでのご協力に感謝し、更にご登録をお願いします。

チャンネル登録

議会改革と ICT 化を学ぶ　姫路市・堺市行政調査報告

越谷市議会議会運営委員会では、10 月 19 日に兵庫県姫路市議会、20 日に大阪府堺市議会を訪問し、議会改革や ICT 化の取り組みについて行政調査を行った。

近年、地方議会には市民への説明責任の充実や、迅速かつ効率的な議会運営が求められている。その中で、全国の先進自治体ではデジタル技術を活用した議会改革が進められており、今回の調査ではその具体的な取り組みを学んだ。

姫路市議会では、タブレット端末を活用したペーパーレス会議の運用や、議会 ICT 化に向けたルール整備について説明を受けた。議案書や委員会資料などを電子化することで、大量の紙資料の印刷や配付に要する経費と労力を削減し、議員や職員の業務効率化につなげてる。

また、ICT 活用に際しては運用ルールを明確に定め、円滑な議事運営と情報管理の両立を図っていた。

一方、堺市議会では「議会活性化」の取り組みについて説明を受けた。市民に開かれた議会を目指し、情報発信の充実や議会機能の強化に積極的に取り組んでおり、議会として政策形成や市民との対話を重視する姿勢が印象的だった。また、災害時や緊急時においても議会機能を維持するための ICT 活用やオンライン対応についても学び、多様な状況に対応できる議会運営の重要性を再認識した。

人口減少や少子高齢化など、多くの自治体が共通の課題を抱える中で、市民の信頼に応える議会づくりがますます重要になっている中、単なるデジタル自治体の形成ではなく、市民にとって議会のシステム化がどこまで機能し、その説明責任を果たすのか、が問われている。

（１０月１９日、２０日・月曜日、火曜日）

一列にバス停に並ぶ長蛇の列の市民



今朝の駅立ちは、新越谷駅東口で通常通り午前６時前から市政レポートの配布を開始した。この駅は市内では最も通勤客が多い駅で、引きもきらず JR 南越谷駅との連絡通路は、この時間帯は混雑するのが日常の風景だ。

余りの混雑に、最初の配布場所に直進する通勤客を避けて移動するのも何時ものことだ。

それでも、馴染みの市民の方からは、市政レポートを受け取って頂き、おはようございます、ご苦労様と声を掛けて頂く。

ただ、通勤客の姿は本当に忙しそうで、せかせかと速足で通行して行く風景に、早朝からこんな姿で通勤する日常はやはり人間性を失くして行く行為に見えてしまう。

しかし最寄りのバス亭に行儀よく並ぶ４０m 近く整列する姿にも日本人の特性を見せてくれたのだが。（１０月２３日・金曜日）（裏へ）

「働く」をひらくと、まちが変わる。議員バーで見えた地域の力

10月26日、コミュニティカフェ・ガヤChill.で、第13回「議員と語るコンセプトバー（議員バー）」を開催した。今回のテーマは「『働く』をひらくと、まちが変わる。

仕事とは単に収入を得るための手段ではない。人とのつながりを生み、自らの役割を実感し、地域社会との関係を築く営みでもある。今回の議員バーでは、その「働く」という言葉をさまざまな角度から見つめ直す機会となった。

ゲストには、障がい者雇用や地域づくりに取り組む福祉ネットワークさくら代表の横山由紀子氏、越谷市議会議員の齋藤豪人氏、越谷市建設部長の北村真一氏を迎えた。

横山氏からは、障がいのある方が地域で働くことの意義についてお話しいただいた。一人ひとりの個性や能力を活かしながら働ける環境を整えることは、当事者のためだけではなく、地域全体を豊かにすることにつながる。誰もが参加できる社会こそが、これからのまちづくりの基盤であることを実感した。

齋藤議員からは、Ｊリーグ選手から市議会議員へ転身した経験や、市政に取り組む思いについて語っていただいた。スポーツの世界で培った挑戦する姿勢が、議会活動にも活かされていることが伝わり、参加者との活発な意見交換が行われた。また北村部長からは、市民が日々利用している道路や公共施設がどのような計画や工事を経て整備されているのかについて、クイズ方式を採用して分かりやすい説明があった。普段は見えにくい行政の仕事への理解が深まり、参加者からも多くの質問が寄せられた。

次回の第14回議員バー開催は、11月27日（金）19時から、テーマは「元気なまちは、人とのつながりから」。越谷市リハビリテーション連絡協議会副会長の早乙女和幸氏、越谷市議会の工藤秀次議員、越谷市市民協働部長の藤城浩幸氏をゲストに迎え、地域リハビリ、市民協働、議会活動を通じたこれからのまちづくりについて語り合う。気軽な対話の場にぜひご参加を。　　（１０月２６日・月曜日）

長野県上田市の「無言館」で学ぶチームパシュート研修旅行

一泊二日でチームパシュートのメンバーである女性の出身地である長野県上田市の「無言館」を訪れた。



この施設は戦没画学生の情報を表示している。あの日中戦争、太平洋戦争での戦死者は三百十数万人といわれ、昭和十八年十月の小雨ふる神宮外苑から学徒出陣した学生も数万余といわれている。現在「無言館」に収蔵されている画学生は百三十名、おそらくこの何倍もの戦没画学生の作品が、今もどこかで私たちに発見されるのを待っていると考えられる。

遠い見知らぬ異国くにで死んだ画学生よ

（館主あいさつ全文）

私はあなたを知らない
知っているのはあなたが遺のこしたたった一枚の絵だ　あなたの絵は朱い血の色にそまっているが
それは人の身体を流れる血ではなく
あなたが別れた祖国のあのふるさとの夕灼やけ色　あなたの胸をそめている父や母の愛の色だ　どうか恨まないでほしい　どうか咽なかないでほしい
愚かな私たちがあなたがあれほど私たちに告げたかった言葉に
今ようやく五十年も経ってたどりついたことをどうか許してほしい
五十年を生きた私たちのだれもが
これまで一度として
あなたの絵のせつない叫びに耳を傾けなかったことを
遠い見知らぬ異国で死んだ画学生よ
私はあなたを知らない
知っているのはあなたが遺したたった一枚の絵だ
その絵に刻きざまれたかけがえのないあなたの生命の時間だけだ

窪島誠一郎
一九九七・五・二（「無言館」開館の日に）

（１１月１日、２日・日曜日、月曜日）